エンカウンター・グループにおけるアンケートの活用（1）

—スケール作成の試み—

○坂中正義（福岡教育大学）
高橋紀子（京都文教大学 学生相談室）

【問題と目的】

エンカウンター・グループ(以下、EG)は、セッションをいかに過ごすかがグループの成否を決める。ファシリテーター（以下 fac.）は、セッション中のメンバーの発言や様子をファシリテーションの主な情報源とするが、メンバーの体験認知は表現されないことも多く、fac.がメンバー全員に目を向けることが難しいこともある。セッションアンケート（以下、SA）は、そこを補うことが出来、次のセッションのファシリテーションに役立つ。

EGで用いるSAは、研究重視のものを除くと、自由記述を中心にセッションの魅力度という数量的指標を用いたものが多く用いられてきた（野島, 1983）。セッションの魅力度は、メンバーの体験を総合的に把握はできるものの、その指し示すものはやや把握しにくい。その意味で数量的指標については未だ検討の余地があると考えられる。

以上より、本研究の目的は、メンバーのセッション体験の内実が検討でき、次のセッションのファシリテーションの指針として利用しやすいSAを作成することを目的とする。またこのSAは、構成的ＥＧ（以下、SEG）、ベーシックEG（以下、BEG）で共用可能なものとする。

【方法】

対象：SEG 4グループ 137名（2グループは大学生対象の自発参加グループで、1泊2日の日程で3セッションであった。参加者はそれぞれ43名と42名で計85名であった。2グループは大学生対象の研修型グループで、授業の180分で1セッションが行われた。参加者はそれぞれ26名ずつで、計52名であった）。BEG 2グループ 16名（いずれも大学院対象の自発参加グループで、3泊4日の日程で9セッションであった。参加者は7名と9名であった）

SAの作成：これまでの研究とfac.体験を踏まえ、目的に沿った項目を検討した。メンバーの負担軽減のため10項目に厳選した。また、セッションの合間にもfac.が参考にしやすいよう、単純な7件法とした。

【結果と考察】

分析：セッション毎に各項目の基本統計量を算出し、プロセス進行に伴う平均値の推移と項目間の相関関係を検討した。その結果、魅力度と連動して動く項目と、連動しない項目が確認された。特にNo5「やらされ感」は特徴的な変化がみられた。また、BEGのみ魅力度との有意な相関がみられる項目があり、EGの形態により項目の関連性も異なることが明らかになった。

以上より、従来魅力度として測定されているものの特徴が明確になった。また、このSAは両形態での共通性と差違性の抽出が可能なことが確認された。

SA活用可能性：SAの実践での活用について考えると、例えば今回の分析で特徴的であった「やらされ感」の取り扱いがある。SAでfac.がメンバーの主体感覚の持てなさを把握するのは、グループの安全感を保証する上で重要である。またこの表明はグループが展開する起点にもなりうる。No.5はそれらを反映した項目といえる。ここに着目しつつ、セッションでの様子とSAへの記入の格差を丁寧に取り扱うことが重要であろう。

今後の課題：No5に関連したネガティブインパクトについての項目及び今回の項目にないグループのまとまりについての項目の追加が示唆された。

Table　セッションアンケート項目

No1 安心感を感じた	No6 ファシリテーターからの配慮を感じた
No2 自分を充分に表現した	No7 メンバーからの配慮を感じた
No3 他のメンバーへ積極的に関わった	No8 他のメンバーに配慮した
No4 セッションに積極的に関わった	No9 自分に向き合えた
No5 セッションを無理矢理やらされた	No10 他のメンバーに向き合えた